

青森県立高等学校教育改革推進計画に関する
地区意見交換会（東青地区）における主な意見

令和3年3月9日

目次

1	東青地区の中学校卒業生数の推移と全日制課程の学級数の見込み.....	1
2	全日制課程の学校規模・配置に関する意見.....	2
(1)	重点校・拠点校・地域校の配置等.....	2
(2)	委員の意見に基づく学校配置シミュレーション.....	3
ア	全ての学校を配置する場合.....	3
イ	東青地区の重点校を青森高校、青森東高校として配置する場合.....	5
ウ	青森西高校と浪岡高校を統合して新設校を配置する場合.....	7
エ	青森北高校と浪岡高校を統合して新設校を配置する場合.....	9
(3)	その他の意見.....	11
3	定時制課程及び通信制課程の配置に関する意見.....	12
4	多様な教育制度に関する意見.....	13
(1)	全国からの生徒募集.....	13
(2)	その他の教育制度.....	15
5	その他.....	15
【参考1】	委員名簿（東青地区）.....	16
【参考2】	オブザーバー名簿（東青地区）.....	17
【参考3】	地区意見交換会の開催状況（東青地区）.....	17

1 東青地区の中学校卒業生数の推移と全日制課程の学級数の見込み

		東青	西北	中南	上北	下北	三八	県計
中学校卒業生数	R4	2,492人	985人	2,112人	1,583人	578人	2,418人	10,168人
	R9 (対R4)	2,216人 (△276)	824人 (△161)	1,935人 (△177)	1,486人 (△97)	464人 (△114)	2,262人 (△156)	9,187人 (△981)
	R14 (対R4)	1,942人 (△550)	752人 (△233)	1,727人 (△385)	1,413人 (△170)	405人 (△173)	2,020人 (△398)	8,259人 (△1,909)
募集学級数	R4	46c1	19c1	39c1	33～34c1	13～14c1	39c1	189～191c1
	R9 (対R4)	42c1 (△4)	16c1 (△3)	36c1 (△3)	30～31c1 (△3)	10～11c1 (△3)	36c1 (△3)	170～172c1 (△19)
	R14 (対R4)	37c1 (△9)	14c1 (△5)	33c1 (△6)	28～29c1 (△5)	9～10c1 (△4)	32c1 (△7)	153～155c1 (△36)

※ 中学校卒業生数は、令和2年5月1日現在の児童生徒数を基に高等学校教育改革推進室において各年3月の生徒数を推計したものであり、変動が生じる可能性がある。

※ 募集学級数は、各年度の全日制課程における見込み。

※ 募集学級数は、地域校の配置に関して基本方針に基づき入学状況等により対応することから、幅を設けて示している。

※ 令和14年度の中学校卒業生数等については、第2期実施計画の学校規模・配置を検討するための参考として示している。

■ 令和4年度時点の学校配置状況

学校・学科		年度等	第1期実施計画(H30～R4)		第2期実施計画(R5～R9)		第3期実施計画(R10～R14)		備考
			期間内増減	R4学級数	期間内増減	R9学級数	期間内増減	R14学級数	
重点校	青森高校	普通	△1	6					
	青森西高校	普通	0	6					
	青森東高校	普通	△1	6					
	平内校舎	普通	△1	0	—	—	—	—	R1募集停止 R2年度末閉校
	青森北高校	普通	△1	4					
		スポーツ科学	0	1					
地域校	今別校舎	普通	△1	0	—	—	—	—	R2募集停止 R3年度末閉校
	青森南高校	普通	△1	4					
		外国語	0	1					
	青森中央高校	総合	0	5					
	浪岡高校	普通	0	2					
拠点校	青森工業高校	工業	△1	6					
拠点校	青森商業高校	商業	△1	5					
	計		△8	46	△4	42	△5	37	

2 全日制課程の学校規模・配置に関する意見

(1) 重点校・拠点校・地域校の配置等

① 重点校・拠点校

- 配置の考え方については、このままで良い。
- 目的、役割を持って配置されていると思うため、今後もそのような目的を持って続けてほしい。
- 重点校を各地区2校にすることが、本県高校教育の活性化につながる。東青地区は青森東高校をもう1校重点校として格上げすべき。
- 難関大学や医学部医学科への進学希望者に対応するため、重点校を県内6校から3校（青森高校・弘前高校・八戸高校）に絞ってみてはどうか。
- 役割等を一般県民が分かるように周知してほしい。

(2) 委員の意見に基づく学校配置シミュレーション

ア 全ての学校を配置する場合

	第1期実施計画	第2期実施計画		第3期実施計画
	R4 (期間内最終年度)	R5~R9		R10~14
重点校	青森 6学級		青森 ○学級	
拠点校	青森工業 6学級		青森工業 ○学級	
	青森商業 5学級		青森商業 ○学級	
連携校	青森西 6学級		青森西 ○学級	△5学級
	青森東 6学級		青森東 ○学級	
	青森北 普通科4学級 スポ科1学級 5学級	△4学級 →	青森北 普通科○学級 スポ科○学級 ○学級	
	青森南 普通科4学級 外国語科1学級 5学級		青森南 普通科○学級 外国語科○学級 ○学級	
	青森中央 5学級		青森中央 ○学級	
	浪岡 2学級		浪岡 ○学級	
	合計	46学級	△4学級 →	

※ 統合や学級減等の対象となりうる学校については、学級数を「○学級」と示している。

※ 統合や学級減等については、実施計画期間のいずれかの年度に実施する。

① シミュレーションの基となった意見

○ 学級減等に対応し、できる限り存続させた方が良い。

② 期待される効果等

- これまでの学校数が維持されるため、進路選択への影響が比較的少ない。
- 学級減等に対応し、できる限り存続させた方が良い。家庭の経済的理由によって通学費や下宿代等が負担増となり、公教育を受ける機会を失わせてしまうことを懸念している。

③ 更に検討を要する課題等

- 重点校、拠点校の学校規模は維持すべきと考えるが、連携校の中で4学級減が必要ということになり、学校規模の標準となる1学年当たり4学級を維持できるかが課題である。
- 重点校、拠点校の規模は維持せざるを得ないと思うが、学力レベルの維持という点も考えていかなければならない。
- 拠点校については、他の職業高校との連携や協力をさらに強める必要があるため、安易に学級減すべきでない。
- 子どもたちのニーズに合わせ、倍率の高い学校はそのまま残し、ニーズがあまりない高校から順に減らすのが一番良い。
- 学級減による影響を防ぐ方策を議論すべきである。仮に学級減により5学級規模となったとしても、習熟度により6学級に展開して授業を進めることも可能だろう。
- 重点校以外の学級数の多い学校から順次削減し、入学者数が定員を大きく下回っている浪岡高校についても1学級減らした上で、現在ある学校を存続させるべき。
- 浪岡高校が今後さらに小規模化した場合、生徒が入学後、できることとできないことがある。浪岡地域の子どもたちを含め、どのような高校を提供していくのが良いか真剣に考える必要がある。
- 浪岡高校の存続を目的とするのであれば、他校にはない特色のある学科の設置等を考えていく必要がある。
- 浪岡高校のバドミントンに関する活動は非常に特色があるため、浪岡高校へスポーツ科学科を1～2学級設置しても良いのではないかと。また、他地区の地区意見交換会の状況も踏まえると、現時点では浪岡高校の統合を急がなくても良いのではないかと。
- 学級数の削減を考えるのであれば、定員割れを起こしている青森北高校の普通科、スポーツ科学科、青森南高校の外国語科、青森中央高校、また、断然低い数字になっている浪岡高校から優先的に削らざるを得ない。ただ、浪岡高校が学級減となった場合、高校として維持できるか懸念される。
- 青森北高校のスポーツ科学科や青森南高校の外国語科については、特色あるカリキュラムによって教育活動を行っていると聞いており、このことも踏まえる必要がある。
- 国の方針として普通科の多様化が求められる中、青森北高校のスポーツ科学科や青森南高校の外国語科の活動内容は有効な形で生かせるのではないかと。各高校が持っているノウハウは、1回途切れてしまうと改めて構築することが難しくなるため、現在の活動を継続していけるような在り方も考える必要がある。

イ 東青地区の重点校を青森高校、青森東高校として配置する場合

	第1期実施計画	第2期実施計画		第3期実施計画
	R4 (期間内最終年度)	R5~R9		R10~14
重点校	青森 6学級		青森 ○学級	
	青森東 6学級		青森東 ○学級	
拠点校	青森工業 6学級		青森工業 ○学級	
	青森商業 5学級		青森商業 ○学級	
	青森西 6学級		青森西 ○学級	
	青森北 普通科4学級 スポ科1学級 5学級	△4学級 →	青森北 普通科○学級 スポ科○学級 ○学級	△5学級
	青森南 普通科4学級 外国語科1学級 5学級		青森南 普通科○学級 外国語科○学級 ○学級	
	青森中央 5学級		青森中央 ○学級	
	浪岡 2学級		浪岡 ○学級	
連携校				
合計	46学級	△4学級 →	42学級	37学級

※ 統合や学級減等の対象となりうる学校については、学級数を「○学級」と示している。

※ 統合や学級減等については、実施計画期間のいずれかの年度に実施する。

① シミュレーションの基となった意見

○ 重点校を各地区2校にすることが、本県高校教育の活性化につながる。東青地区は青森東高校をもう1校重点校として格上げすべき。

② 期待される効果等

- 重点校を各地区に2校配置し、お互いにライバル校として切磋琢磨することによって、学習のみならずスポーツにおいても相乗効果がある。

③ 更に検討を要する課題等

- 青森東高校が6学級で維持されることにより、学級減の対象となる学校数が減るため、連携校に与える影響が大きい。
- 重点校を2校設けた場合、重点校としての役割分担や連携に係る体制の構築が難しくなる。重点校、連携校の取組が進んでいる中、成果が出てくるのはこれからと考えており、大きな変更を加えることは拙速になる可能性があるかと危惧している。
- 青森東高校を重点校とした上で、青森南高校の外国語科を募集停止すべき。文部科学省は急速なグローバル社会の進展に対応する人材の育成を図る観点から、普通教育の中で英語教育を充実、発展、向上させていく施策を進めており、本県でも三沢高校、田名部高校にあった英語科を募集停止している。

ウ 青森西高校と浪岡高校を統合して新設校を配置する場合

	第1期実施計画	第2期実施計画		第3期実施計画
	R4 (期間内最終年度)	R5～R9		R10～14
重点校	青森 6学級		青森 ○学級	
拠点校	青森工業 6学級		青森工業 ○学級	
	青森商業 5学級		青森商業 ○学級	
連携校	青森東 6学級		青森東 ○学級	△5学級
	青森北 普通科4学級 スポ科1学級	△4学級 →	青森北 普通科○学級 スポ科○学級	
	青森南 普通科4学級 外国語科1学級		青森南 普通科○学級 外国語科○学級	
	青森中央 5学級		青森中央 ○学級	
	青森西 6学級		新設校	
	浪岡 2学級		○学級	
合計	46学級	△4学級 →	42学級	37学級

※ 統合や学級減等の対象となりうる学校については、学級数を「○学級」と示している。

※ 統合や学級減等については、実施計画期間のいずれかの年度に実施する。

① シミュレーションの基となった意見

- もう少し高校自体を減らし、ある程度の規模を維持してほしい。
- 浪岡地域の子どもたちを含め、どのような高校を提供していくのが良いか真剣に考える必要がある。
- 浪岡地区の生徒がJR奥羽本線を利用し駅から徒歩10分程度で通学できる交通アクセスの良さを考慮し、青森西高校と浪岡高校を統合してはどうか。

② 期待される効果等

- 子どもたちが様々な授業や部活などを選べるようになる。
- 保護者の観点として、学級数の削減等により教員数が少なくなれば高校の質の問題も出てくるため、統廃合しても良い。
- 学級減により教員数が削減されれば、専門教科の履修が困難となるため、教育水準の維持のためにも統廃合も致し方ない。

③ 更に検討を要する課題等

- 浪岡高校への全国からの生徒募集の導入が叶わないのであれば、将来的なことを考慮し、統合も避けられない。仮に統廃合するならば、県教育委員会には統合校に通うための下宿、寮等を含めた通学手段の保証や、地域への丁寧な説明をお願いしたい。
- 子ども数が減少していく中で、将来的には統廃合も必要なのかもしれないが、新設校の場所も含めて考えることが重要となる。
- 浪岡地区からは、青森市よりも中南地区の高校に通っている生徒が多いという話も聞いたところであり、このような点も加味しながら検討していく必要がある。
- 統合した上で新設校から2学級分、青森南高校の外国語科1学級分、さらに学校規模の標準を考慮しつつ他の高校で1学級分の学級減を行えば良い。
- 青森西高校と浪岡高校の統合が良い。また、校舎については、浪岡高校は学級数の減少に合わせて校舎を集約化していることを踏まえ、青森西高校の校舎を活用した方が良いと思われるが、新しく建てることも含め、市町村の意見を聞きながら検討を進めてほしい。
- 新設校とはいっても、結果的に浪岡高校が統合により吸収されるという形に変わりはないと捉えており、統合案には賛同できない。浪岡高校には、県外から部活動を目的として浪岡中学校へ入学した生徒がそのまま進学している現状があることや、青森市内の他の高校と統合した場合、浪岡地区の生徒が新設校を志望するのか懸念があるため、様々な視点から検討が必要である。
- 地理的な観点や浪岡中学校の卒業者の進学状況を考慮すると、青森西高校と浪岡高校との統合が妥当である。なお、浪岡高校ではバドミントンに一生懸命取り組んでいるため、このような流れが統合後も続くような体制の構築が必要である。

エ 青森北高校と浪岡高校を統合して新設校を配置する場合

	第1期実施計画	第2期実施計画		第3期実施計画	
	R4 (期間内最終年度)	R5～R9		R10～14	
重点校	青森 6学級	青森 ○学級			
拠点校	青森工業 6学級	青森工業 ○学級			
	青森商業 5学級	青森商業 ○学級			
連携校	青森西 6学級	青森西 ○学級			
	青森東 6学級	青森東 ○学級			
	青森南 普通科4学級 外国語科1学級 5学級	青森南 普通科○学級 外国語科○学級 ○学級	△4学級 →	△5学級	
	青森中央 5学級	青森中央 ○学級			
	青森北 普通科4学級 スポ科1学級 5学級	新設校 普通科○学級 スポ科○学級			
	浪岡 2学級	○学級			
	合計	46学級	△4学級 →		42学級

※ 統合や学級減等の対象となりうる学校については、学級数を「○学級」と示している。

※ 統合や学級減等については、実施計画期間のいずれかの年度に実施する。

① シミュレーションの基となった意見

- もう少し高校自体を減らし、ある程度の規模を維持してほしい。
- 浪岡地域の子どもたちを含め、どのような高校を提供していくのが良いか真剣に考える必要がある。
- 青森北高校にはスポーツが盛んというイメージがあるため、バドミントンに一生懸命取り組んでいる浪岡高校と統合することも考えられる。

② 期待される効果等

- 子どもたちが様々な授業や部活などを選べるようになる。
- 保護者の観点として、学級数の削減等により教員数が少なくなれば高校の質の問題も出てくるため、統廃合しても良い。
- 学級減により教員数が削減されれば、専門教科の履修が困難となるため、教育水準の維持のためにも統廃合も致し方ない。

③ 更に検討を要する課題等

- 浪岡高校への全国からの生徒募集の導入が叶わないのであれば、将来的なことを考慮し、統合も避けられない。仮に統廃合するならば、県教育委員会には統合校に通うための下宿、寮等を含めた通学手段の保証や、地域への丁寧な説明をお願いしたい。
- 子ども数が減少していく中で、将来的には統廃合も必要なのかもしれないが、新設校の場所も含めて考えることが重要となる。
- 浪岡地区からは、青森市よりも中南地区の高校に通っている生徒が多いという話も聞いたところであり、このような点も加味しながら検討していく必要がある。
- 新設校とはいっても、結果的に浪岡高校が統合により吸収されるという形に変わりはないと捉えており、統合案には賛同できない。浪岡高校には、県外から部活動を目的として浪岡中学校へ入学した生徒がそのまま進学している現状があることや、青森市内の他の高校と統合した場合、浪岡地区の生徒が新設校を志望するのか懸念があるため、様々な視点から検討が必要である。
- スポーツの観点では青森北高校と浪岡高校の統合も考えられるが、地理的な観点や浪岡中学校の卒業者の進学状況を考慮すると、青森西高校と浪岡高校との統合が妥当である。なお、浪岡高校ではバドミントンに一生懸命取り組んでいるため、このような流れが統合後も続くような体制の構築が必要である。

(3) その他の意見

<充実した教育環境の整備>

- 学校規模が小規模になることで、教員配置や部活動にも影響することについて周知することが大事である。
- 1学級40人として重点校6学級(240人)以上、拠点校が一つの専門学科で1学年当たり4学級(160人)以上の規模を標準とするのは現時点で妥当な数値目標である。
- 学校規模の標準を4学級以上とすると、それ以下は東青地区では浪岡高校が該当するため、廃校に向かうのかという複雑な気持ちもある。4学級が適正と納得しているが、4学級に縛られて大丈夫かという気持ちもありバランスをうまく考えていく必要がある。
- 教育の成果を上げるための生徒の望ましい集団規模も十分分かるが、異年齢集団での教育活動をはじめ、地元高齢者との交流等を通して育まれる優しい心や思いやりの心、年配者に対する畏敬の心のほか、地元伝統芸能を継承する課外活動等を通して郷土に対する愛着や誇りが芽生えるなど、心豊かでたくましい生徒の育成が期待できるため、1学級規模となってもすぐに統廃合対象とせず存続させることを希望する。

<学級編制の弾力的な対応>

- 複数の選択科目が開設できなくなっていく状況を踏まえると、1学級当たりの生徒数を少なくしつつ、教職員定数も増やすなどの取組が中長期的に必要である。
- 全国的に生徒数は減少していく状況にあるため、1学級35人編制が可能となるよう教職員定数の改正に向けて国へ働きかけができないか。
- 少人数学級編制の導入は、きめ細かな指導をする上でも是非実現できるよう、全国都道府県教育長協議会のみならず、全国都道府県知事会等を通じて強く働きかけてほしい。
- 職業学科、スポーツ科学科、外国語科については、1学級当たりの生徒数を30人とし、教員の不足分は退職教員等による教科指導に係る非常勤講師を配置して補うことが考えられる。

<学科等>

- 第1期実施計画によれば、グローバル教育等の特定の分野における先進的な取組を重点校に担わせるとしているが、各地区の2番手・3番手の高校をグローバル教育等の推進校にしてはどうか。東青地区は青森南高校に外国語科が設置されているため、推進校にすると良い。
- グローバル教育等の推進校指定に関しては、重点校に集中させるのではなく、青森東高校や青森南高校等の進学校にもバランスよく振り分けることで、高校の独自性や特色が明確になり、中学校卒業予定者も進路選択をしやすくなるという利点がある。
- 青森北高校今別校舎が令和3年度末に閉校となるため、在来線や新幹線の駅に近い青森北高校や青森西高校に、今後のニーズに対応できる学科を設置することで、教育機会の確保及び進学希望者の増加を見込む方法もある。
- 全国から生徒が集まり、全国的に活躍しているバドミントン部に加え、浪岡地区にはスポーツ施設が充実している。バドミントンを含めてスポーツで生徒を育てることも大きな特色と捉え、可能であれば浪岡高校にスポーツ科学科のような学科を設置してはどうか。

<その他>

- 青森高校ではスーパーサイエンスハイスクールやスーパーグローバルハイスクールといった非常に特色ある取組をしており、このように、各校が独自の特色を打ち出せば、中学生が進学する際の判断材料の一つになり、各校への志望が分散する。各校の特色化の取組を見た上で、統合等を考えるという方法もある。
- 限られた予算の中で適正に高校を配置するという視点も大事であり、非常に生徒数が少ない高校に多くの予算を使うことはどうなのか。

3 定時制課程及び通信制課程の配置に関する意見

- 定時制課程・通信制課程については、学び直しの生徒もたくさんいる。また、様々な困難等を抱えて入学する生徒もおり、最後のセーフティーネットとしての役割を十分果たしているため現状どおりが良い。

【参考】第1期実施計画における配置状況

定時制課程	北斗高校（普通科・3学級） 青森工業高校（工業科・1学級）※令和3年度募集停止
通信制課程	北斗高校（普通科）

4 多様な教育制度に関する意見

(1) 全国からの生徒募集

① 導入の必要性等

- 生徒数が少なくなっていく中で非常に大事な取組である。
- 将来的な青森県への移住につながるチャンスも期待できるため、速やかに導入すべき。
- 効果もあると思うが、導入に当たっては費用対効果の判断が必要である。

② 導入範囲・方法

- 手始めとして、寮が整備されている名久井農業高校等の職業教育を主とする専門学科を有する学校から導入してはどうか。
- 地域校には市町村の意見を踏まえながら、職業教育を主とする特色ある学科を設けた上で導入してはどうか。なお、浪岡高校も含めて考えることができるのであれば検討してほしい。
- 浪岡高校には、県外から部活動を目的として浪岡中学校へ入学した生徒がそのまま進学している現状があるため、部活動を特色として浪岡高校に全国からの生徒募集を導入できないか。
- 「空き家」を活用して学生寮のような運営が可能となれば、他県の保護者も安心して本県高校を受検させることにつながる。
- ただ制度的に青森県で入学できるだけでは、他県から生徒が志望するとは考えられないので、青森県に来ないと受けられない授業など、特色あるカリキュラムがあれば良い。
- 全国募集を行う前に、当該校の特色化を図るべき。一つの手段として、近年注目されているN高をモデルに、オンラインによる通信教育を主として他県生徒を受け入れ、スクーリングで一定期間の青森市内滞在をノルマにする等、検討の余地はある。
- 高校に魅力がなければ他県からの入学者が見込めないため、例えば、日本を代表する芸術家を特別講師として招聘するなど、指導者の確保がポイントと考える。
- 市町村単独ではなく県が一緒になって支援し、それぞれの高校で魅力ある学校づくりに取り組んでいければ良い。

③ 県全体の意見まとめ（参考）

■ 導入範囲・具体的な高校例・効果等

導入範囲	具体的な高校例	効果等
特色ある教育活動を行っている高校（学科）	弘前南 柏木農業 黒石（情報デザイン科） 百石（食物調理科） 八戸西（スポーツ科学科） 八戸東（表現科） 名久井農業	○ 特色ある学科や研究活動等の実施により、県外からの入学者が期待できる。
職業教育を主とする専門学科を有する高校	農業科、水産科、工業科、商業科、家庭科、看護科を有する高校	○ 本県の地域資源等を活用した特色ある教育活動を実施しており、入学者が見込まれる。
職業教育を主とする専門学科を有する高校のうち、寄宿舎を有する高校	五所川原農林 三本木農業 名久井農業 八戸水産	○ 県内生徒の使用に支障を与えずに県外生徒が活用できれば、生活環境が確保される。
地域校の配置の考え方に該当する高校	鱈ヶ沢 六ヶ所 大間 三戸	○ 入学者数の確保につながることを期待できる。
他県から注目度の高い部活動を有する高校	浪岡（バドミントン部） 三本木農業（相撲部） 八戸工業（アイスホッケー部） 八戸商業（アイスホッケー部）	○ スポーツで生徒を育てることも大きな特色であり、入学者が見込まれる。

■ 更に検討を要する課題等

区分	更に検討を要する課題等
募集人数等	○ 県内生徒のニーズや学習機会を確保するため、県外生徒の定員の制限（募集枠の設定等）を考える必要がある。 ○ 単年度留学などの制度を導入してはどうか。
生活環境等	○ 県外生徒が安心して学校生活を送れるよう、生活環境を確保する必要がある、宿泊施設や生活面の支援を市町村がどれだけバックアップできるかが課題となる。 ○ 導入する場合、県としても支援（ホームページやパンフレットによる広報等）が必要である。 ○ 生活環境を確保するため、「空き家バンク」等の活用やホテル・宿泊施設等の活用も考えられる。 ○ 地域によっては、下宿施設数が減少している状況がある。
高校の魅力づくり	○ 県外生徒を呼び込むためには、魅力ある教育活動が求められる。他県の事例等も参考にしながら検討する必要がある。 ○ 教育活動の充実に向けた教育課程の見直しや特色ある学科の設置等を検討してはどうか。 ○ 地域資源等を活用して魅力をアピールすることが考えられる。 ○ 県外生徒の受入に向け、高校を含めた地域全体で考えられるよう話し合いの場があっても良い。

(2) その他の教育制度

- 中高一貫教育について、中高一貫校に入ってくる中学生は併設型で入ってくる中学生と一緒にいる混在型のクラス編制を避け、「中等教育学校型」のクラスにすべき。保護者の多くは、先取り教育に期待しているため、その要望に応える責任がある。なお、中高一貫校の配置及び学校数は、既に設置されているスポーツ科学科と同様に東青・中南・三八地区に1校ずつで十分である。

5 その他

<特別支援教育の充実>

- 高校においても通級指導など特別支援教育に力を入れていると聞き、大変喜ばしい。小・中学校には特別支援学級があり、生徒の持っている能力によって普通学級と一生懸命交流させるという強い意思を持って学校を運営している。このような取組を続けていくことは、この地区、この県の能力をさらに発揮できる大きな要素である。

<生徒の通学>

- 生徒にとっての目標とする高校（選択肢）は十分ある。課題として、通学方法や下宿・寮などの配置、それらの資金援助など検討を要する。
- 青森、弘前、八戸などに立派なものでも良いので、寮を配置すれば遠方から通学する生徒や保護者も少しは経済的に楽になる。
- 希望の高校に通学するのに公共交通機関では対応できない場合も想定されるが、空き家を活用して学生寮のような運営が可能となれば対応できる。

<その他>

- 中学生は早ければ5～6月には進路に向かって突き進んでいく状況になるため、早めに高校教育改革の情報を示してほしい。

【参考1】委員名簿（東青地区）

（敬称略）

区 分	所 属 等	委 員 名	備 考
市町村教育委員会	青森市教育委員会 教育長	成 田 一 二 三	
	平内町教育委員会 教育長	相 坂 一 則	令和2年10月1日まで
	平内町教育委員会 教育長	渡 辺 伸 一	令和2年12月11日から
	今別町教育委員会 教育長	勝 野 義 彦	
	蓬田村教育委員会 教育長	吉 崎 博	
	外ヶ浜町教育委員会 教育長	五十嵐 義 人	
P T A	青森市P T A連合会 事務局長 （青森市立長島小学校P T A 会長）	賀 田 州 一	
	東津軽郡連合P T A 会長 （外ヶ浜町立三厩小学校P T A 会長）	工 藤 幸 治	
	青森県高等学校P T A連合会 東青地区協議会 会長 （県立青森南高等学校P T A 会長）	泉 夏 樹	
産 業 界	青森商工会議所青年部 副会長	載 本 一	
	東郡地区商工会青年部連絡協議会 会長 （蓬田村商工会青年部 部長）	木 村 修 悦	
小 中 学 校 長 会	青森市小学校長会 会長 （青森市立新城中央小学校 校長）	福 原 正 人	
	東津軽郡小学校長会 会長 （平内町立山口小学校 校長）	小 松 達 弘	
	青森市中学校長会 会長 （青森市立造道中学校 校長）	前 田 眞 己	
	東津軽郡中学校長会 会長 （平内町立東平内中学校 校長）	濱 田 一 博	
	青森県私立中学高等学校長協会 理事 （青森明の星高等学校 校長）	笹 木 正 信	
	元県立青森東高等学校 校長	松 野 洋 祐	進行役
	元県立北斗高等学校 校長	飛 内 文 代	

【参考2】オブザーバー名簿（東青地区）

（敬称略）

所 属 等	オブザーバー名	備 考
県立青森高等学校 校長	宍 倉 慎 次	
県立青森西高等学校 校長	菅 原 文 子	
県立青森東高等学校 校長	前 田 濟	
県立青森北高等学校 校長	高 谷 悟	
県立青森南高等学校 校長	中 道 哲	
県立青森中央高等学校 校長	吉 澤 郁	
県立浪岡高等学校 校長	對 馬 嘉 晴	
県立青森工業高等学校 校長	赤 井 茂 樹	
県立青森商業高等学校 校長	三 上 雅 也	
県立北斗高等学校 校長	渡 部 靖 之	
県立青森第二高等養護学校 校長	甲 田 隆	

【参考3】地区意見交換会の開催状況（東青地区）

	年月日	内 容
1	令和2年 9月 3日	<ul style="list-style-type: none"> ○ 高等学校教育改革に係る経緯・現状等 ○ 学校規模・配置の検討 ○ 多様な教育制度等
2	令和2年12月17日	<ul style="list-style-type: none"> ○ 地区意見交換会委員の意見に基づく学校配置シミュレーションにおいて想定される効果・課題等 ○ 全国からの生徒募集の導入範囲と効果・課題等
3	令和3年 2月 8日	<ul style="list-style-type: none"> ○ 地区意見交換会における主な意見<<整理案>>